



114号
2006/6/1

日中文化交流市民サークル「わんりい」
東京都町田市能ヶ谷町1521-58 田井方
〒195-0053 TEL&FAX:042-734-5100
<http://wanli.web.infoseek.co.jp/>
Eメール: wanli@m2.ocv.ne.jp
ホームページのアドレスが上記に変更になりました。



陝北の人々・麦の収穫 (中国陝西省園川県)

周路 撮影

「わんりい」114号の主な目次

北京雑感その5「北京の交通事情-3」	2
媛媛来信④「美女・貂蟬の謎」	3
黄土高原来信第二部「陝北女娃」8〈巧琴〉	4
松本杏花さんの俳句「拈花微笑」より	5
'06 濟州島漢拏山へ ①-登山口まで	6
四姑娘山麓・フラワーウォッチング-2	8
私の調べた四字熟語[3]・夜郎自大	10
中国を読む③【小蓮の恋人】	11
「あさおサークル祭り」報告	11
「北朝鮮の夏休み」上映会に参加して	12
ラオス山からだより VIII「太郎の図書館を作りたい⑤」	13
アフリカとの出会い XI「カソイト・スラム」	14
「わんりい」掲示板	16

♪ 中国人歌手・趙鳳英さんと一緒に歌おう! ♪

「中国語で歌おう!会」

まちだ中央公民館で新規発足 会員募集中!

会場: まちだ中央公民館 7F・第一音楽室

JR 横浜線町田駅八王子寄り改札口徒歩2分、小田急線南口徒歩5分
町田東急裏109ファッションビル7F

講座日: 原則として、毎月第2金曜日、又は第3金曜日

時間: 19:00 ~ 20:30 会費: 1,500円(一回ごと)

【6月の練習日】 6月16日(金) 19:00 ~ 20:30

練習曲: 「冬のソナタ」のテーマソング

韓国ドラマ「冬のソナタ(最初から今まで~)」は中国でも大ヒット。テーマソングは「从开始到现在」という中国名で多くの歌手が歌っています。きちんと歌えるようになるまで2回か3回に分けて指導いただきます。メロデーは繰り返しますので、ご都合で1回の参加でも楽しめます。

指導: 趙鳳英 (元中国重慶歌舞団歌手、四川音楽学院講師)

*体験参加(1200円)歓迎 *録音機をお持ち下さい。

5月14日から6ヵ月ほど北京に行ってまいります。発展の著しい北京ですから、去年とは違ったことが沢山見られると思いますので、また、この「わんりい」の誌面でお話させていただきますが、出発前に、去年の見聞を基にした北京の様子をお話してみたいと思います。

北京の交通事情をお話していたので、交通信号でちょっと面白いことをご報告します。ある時、北京で車に乗って信号待ちをしていると、前方の赤信号が黄色に変わってそれから青になりました。青信号が黄色になって赤に変わるの納得しますが、「赤信号から青になる予告をする必要は無いのに」と、とても不思議に思いました。それから信号に気をつけて見ていると、中には「青黄赤、青黄赤」と日本と同じ様に変わる信号もあることが分かりました。つまり同じ北京市内で、「青黄赤黄青黄赤黄青」と変わる信号と、「青黄赤青黄赤」と変わる信号の2種類があるのです。

信号で停車する度に気をつけて観察を続けて、少しずつ謎が解けてきました。不思議な信号は、古くからの幹線道路や、中心部から外れたところに多いことが分かりました。新しく開通した道路とか、中心部の道路には、日本と同じ様な信号機がついています。つまり、これは古いタイプなので、新しく設置するところとか、中心部には新式の信号が取り付けられ、これから徐々になくなって行くものようです。

この信号は、縦に「青黄赤」と並んでいるものが多く、中の電気が上から中、下と順に点灯し、下の赤から再び中、上へと移動して行くことが分かりました。中の電灯は上下に移動するだけなので、真ん中の黄色を避けて通れず、赤と青の変わり目には必ず表れるのです。信号の変化はあまり合理的とはいえませんが、この電灯の動きは単純でとても合理的だと思います。原理が分かった時には、思わず独りで笑ってしまいました。今回、この種の信号がまだ残っているか、興味を持って見て来ます。

北京の交通関係のインフラは、まだまだ改善の余地がありますけれど、これからオリンピックに向けて、徐々に充実してくることでしょう。道路を走る車は、数が多くなったばかりでなく、綺麗な車が多くなりました。昔は、車体が凹んでいたり、埃をかぶっていたり、薄汚い車が多かったと思いますが、今では、バスやタクシーも新車がどんどん導入され、オンボロバスとして有名だった連結バスも次々と新しくなっています。

市内の車が綺麗になるに連れて増加してきたのが洗車屋さんです。住まいの近くに、歩道の上に古めかしいソファを据えて、若者がたむろしているところがありました。「昼日中から、いい若い者が座り込んでおしゃべりに興じている…」とちょっと鼻白んで脇を通りすぎておりましたが、ある時、その若者たちが鉢巻をして洗い上がった車を拭いているのを見て、そこが洗車屋さんだと知りました。そういえば、地面が水にぬれていることが多かったと改めて思い出しました。

日本で言う手洗い洗車で、料金は10元だそうです。こんなお店が雨後の筍のようにあちこちに出現しています。中には、「電腦洗車」と銘打って、コンピューター制御の洗車機を導入している店も目に付くようになってきました。一頃よりはだいぶ良くなっていますが、建設工事が多いので、北京の砂埃はかなり酷くて、4、5日もすると車は埃まみれになってしまいます。そのせいか、去年6ヵ月間滞在している間に、洗車屋の数は目覚しく増加しましたが、利用者もそれ以上多くなって、各店の業績も好調のようでした。

北京で車を買う時は、車検登録所でディーラーと待ち合わせをして、買主が自分で登録手続きをして車を受け取るのですが、持ってこられた車は、野外の車置き場からそのまま持ってきただけで、砂埃をかぶり、余分なものは何もついていません。買主は、カー用品販売店へ乗りつけ、洗車をし、フロアーマット等当座必要なものを買うのです。

ディーラーのお店は大きくて綺麗で、店内に展示した車はピカピカに磨き上げてありますが、在庫の車は地面の舗装も完全ではないようなところに並んでいて、納車の時も掃除などせず、そのままって来ようです。登録手続きは、中国では代行が認められていないようなので買主が出向くのは仕方がないとして、日本なら当然迎えに来てくれるでしょうが、こちらでは現地(登録所)集合です。おまけに渡される車は埃だらけ。日本ではちょっと考えられません。毛ばたきの一つもおまけ無しです。

そのせいかどうか、今、北京で目に付くのは、大規模なカー用品を売るお店です。日本でも大きなチェーン店が何系列かあるようですが、北京のお店は、それらと比べて、店の大きさも品揃えも、勝るとも引けを取らないものです。洗車もカー用品も、北京の自家用車の増加につれて、市場がどんどん大きくなるでしょう。どんな風になるか注目して見ていきましょう。

貂蟬は西施、楊貴妃、王昭君と並び、中国の四大美女と言われています。また、「三国志演義」¹⁾では、後漢末ごろ、群雄が割拠し紛争する中、貂蟬は、王允の「連環計」²⁾の策略に協力し、暴君の董卓を滅ぼした重要な人物として、人々に良く知られています。そのほか、中国の文学作品、劇、民間の伝説の中には彼女についての物語が、数え切れないほどあります。

残念ながら、正史では貂蟬の生年月日や出身地や、後半生の行方などに関する資料は殆ど見られませんので、彼女は架空の人物だといわれたりしています。

しかし、山西省には、貂蟬の故郷とされるところがあります。山西省太原市から北へ70キロ離れた所に忻州市というところがあり、その忻州市の近郊に「木芝村」という小さい村があります。その村のお年寄りたちの話では、貂蟬はこの村に生まれ、任と言う苗字で、彼女は少女の頃、宮女として選ばれ、高官の帽子である「貂蟬冠」を管理したので、貂蟬という名前と呼ばれていたそうです。

伝説では、貂蟬が生まれると、村の桃の花や、杏の花などがその美しさに恥じて三年間も咲かなくなり、また、貂蟬が月を拝むと、月に住む嫦娥もその美しさに及ばないと感じ、雲の中に早早と隠れたといわれています。

「三国志演義」では、貂蟬は王允の家妓³⁾でしたが、「連環計」の策略の結果、呂布と一緒に became ました。その後、呂布が曹操⁴⁾に殺された後の彼女の行方については語られておらず、絶世美人の余生がどのようなのかは永遠の謎になりました。

伝説は色々ありますが、桃園で契りを結んだ三兄弟(劉備、関羽、張飛)の一人である関羽が、呂布の死後、貂蟬を保護して村に戻し、老後まで村で生きたともいわれています。木芝村には、その昔、貂蟬のお墓、廟、貂蟬の劇台、関羽の像、及び王允と名づけられた道などがあったそうです。また、山西省社会科学院の有名な学者が調査し、貂蟬は実在した人物で、「木芝村」が確かに貂蟬の故郷であるとの説もあります。

地元ばかりではなく、山西省の人々の間で「忻州没

好女、定襄⁵⁾没好男」(忻州には、綺麗な女はいない、定襄には立派な男はいない)というような古いことわざが言われたりしています。それは、忻州では貂蟬のような絶世の美人が生まれ、定襄では呂布のような立派な男が生まれ、地もとの精華を吸い尽くしてしまったので、再び綺麗な女性、立派な男性が現われないという意味なのです。



注1)「三国志演義」: 紀元2世紀から3世紀の後漢末、群雄割拠の時代から、魏(曹操)、吳(孫権)、蜀(劉備)が覇権を争って、それぞれが建国するまでのいきさつとその滅亡の経緯を、いろいろな挿話を織り込んだ物語として、明代の羅貫中が纏めた。中国では「三国演義」または、「三国通俗演義」といわれている。

注2)「連環計」: 当時、横暴の限りを尽くす董卓を見かねた王允が、王允の家妓であった貂蟬を使い、董卓とその養子である呂布と仲たがいをさせ、勇猛無比をもって鳴らす呂布に董卓を誅殺させた。

注3)家妓: 家で雇われている妓女。

注4)曹操: 後漢の配下の王国という形で魏国を建国。生存中は、漢の丞相の肩書きで通した。曹操の死後、息子の曹丕が後漢から禅譲を受け帝位に付くと太祖武帝と追称された。

注5)定襄: 定襄県で、忻州市から北へ50キロ離れ、呂布に関する古跡があり、呂布の古里と呼ばれています。

陕西省では、陕西省米脂県が美女・貂蟬の故郷として、陕西省綏徳県が勇猛を鳴らした武将・呂布の故郷としても伝えられているようです。こちらでは、貂蟬と呂布の出身地として、「米脂女と綏徳男」といわれ、米脂の女は聡明で賢く、よく働いて美人、綏徳の男は、苦勞をものともせず労働に耐え、身体も立派であるというのだそうです。

歴史に名を馳せた人物が自分達のところから出たことは誇らしいことです。二人とも既に伝説に近い人物ですので、どちらが正しいか詮議する必要はないでしょう。いずれにしても二人は黄土高原と呼ばれている中国僻地の出身は間違いなさそうです。厳しい生活環境に生きる人々にとって、貂蟬と呂布は歴史に名を留めた自分達の輝く星であり、心の支えなのかもしれません。

(田井)



なったら学校の先生になりたい」と明らかに矛盾したことが書かれています。子供達は皆知っているのです。西安で医学専門学校のお姉さんの一年間の学費は6,000元余りで、これは4年間で30,000元近くなり、黄土高原で生活する家庭にとって正に天文学的数字だということ。父親は出稼ぎに出るしかなく、母親は町でパートとして働いています。昼には家に戻らず、カマドには何個かの干からびた馍馍(何も入っていない饅頭)が置いてあります。きっと彼女達兄弟の昼ごはんなのでしょうか？

その後、南塬村に行く度に巧琴の家に寄り、ある時は、勉強を続けたいなら、すぐにもお金を集めるといふ、友人からの手紙さえ携えて行きました。しかし結局はこの女の子の気持ちを変えることはできませんでした。女の子を見ていると、朝から晩まで、水を汲んだり食事を作ったりで、確かにこの手の仕事をする人がこの家に必要なのだと感じます。父親は出稼ぎで、母親は町で雑用、姉たちや兄は学校で、家には他に誰もいないのですから誰かが家事をする必要があ

るでしょう？ 毎回、此处を通ると、巧琴は私を屋内に招いて飲み物を用意し、ある時は喉が渴いたら食べるようにと何個かの林檎を渡してくれたりしました。

ある夕方、町に帰るので、急ぎ足で下山していると巧琴が桶に半分ほど水を入れて坂の下からよろよろしながらゆっくりと山の方へ登ってきました。私が山を登ると、息はぜーぜーするし、顔中大汗になるし、両足は疲れで力が抜けるし、という有様なのに、まして大人にもなりきれない女の子が水を担いで山道に行くのはどんなにか大変なことでしょう！日は暮れかかり写真に撮るすべはありません。私はずっとこのことが忘れられずにいましたが、それでも、昼間に山で出会っても、水運びの写真を撮るからといって巧琴にもう一度担いでとはとても言い出せることではありません…。

巧琴は真面目ないい子で、お姉さんやお兄さんの勉学のため、家庭の負担を軽減するため自分を犠牲にしているのです。私は巧琴のお姉さんやお兄さんもきっと心の中でこの可愛い優しい妹を気に掛けているに違いないと信じています。

松本杏花さんの俳句 nián huā wēixiào 《拈花微笑》より

碎け落津薔薇に秘めたる熱き情

luò yīng fēnfēn suì
落英纷纷碎

kōng zhī qiān qiān xiè qiángwēi
空枝纤纤谢薔薇

rè qíng bù kū wěi
热情不枯萎

季语：薔薇、夏。

我国宋代陆游的《卜算子 咏梅》中曾描写过梅花的孤傲：“零落成泥碾作尘，只有香如故。”而此首俳句描写的是薔薇、但手法十分相似、由此可见、东方人的审美情趣也是相通已久的。薔薇凋谢了、但其热情却不消散、仍蕴藏在零碎的落英之中。

葉桜の枝垂れに風の重さかな

yīng shù xīn yè duō
櫻樹新葉多

枝条下垂袅娜

柔風重几何

季语：櫻樹葉，夏。

櫻花为春天的季语、但当櫻花凋谢后长出新葉来、则夏垂的枝条随风而动、似乎是计量風兒的重量：風力大时、那纤纤枝条便会如水如波；風力小时、则轻轻摇曳。千姿百态、全凭風兒的力量摆弄。

▶ 動機と濟州島あらし

5月の連休は濟州島へ行こうと思った。日本から近いのでカレンダー通りの5連休で十分実行可能、行ったことがない、韓国最高峰漢拏山(1,950m)に登れる、これが濟州島に決めた動機である。調べるとネットで扱っている「登山ツアー」があり、これは3日間で5万～13万円。5月の連休はもちろん高い方だ。しかし3日間では、運悪く雨の日に登山となることもある。雨降りに登っても何も見えないし、快適ではない。そこで休日5日間を全部濟州島に当て、天気が一番よい日に山登りをすることを考えた。

週4便だった成田⇔濟州間の空路が3月26日から毎日就航することになり、計画が立てやすくなった。こんな小さな島に毎日飛行機が就航するのは、観光客ばかりではなく、歴史的経緯による濟州島出身の韓国人たちが日本に多く暮らしているからである。

インターネットで捜し当てた(株)AT TOURという濟州島の観光会社に事情を説明して窓口になってもらう。日本語担当の金京美さんとでメールをやりとりし、航空券、ホテルなど予約してもらった。彼女からは、ほかに韓国ドラマ事情など、営業品目外も少し教えてもらい、感謝している(고마워요!)

5月1日に日本語版、濟州島天気予報のホームページで、



5月4日が漢拏山「晴」とでたので、4日を登山日とすることにした。

濟州島は香川県ぐらいの面積、人口約57万人に対し2005年の観光客は505万人。韓国ドラマ「チャングムの誓い」、映画「シユリ」などのロケ地で韓国最大のリゾート地。島の産業は、観光業が最大で、農作物はミカン、ニンニクなど。全島溶岩台地なので、雨が降ってもすぐ地面にしみこんでしまう。平野部の年間降水量は2044mm。川はある

が、ほとんど涸れ川で、大雨の時だけ水が流れる。水害や、洪水は無い、土砂がないので土砂崩れはないようだ。表土がほとんど無いので、どこでも溶岩がごろごろしている。地震がないことや、風が強いのも特徴だ。濟州島は古くは耽羅国という独立国であった。今は平和な島だが、5世紀に百済に帰属し、その後蒙古の元、日本の倭寇、近年の帝国日本、「濟州島四・三事件」など虐げられた歴史があった。主義主張が違っても、武力で問題を解決することが無いように願う。

▶ ホテルまで

一行4人は5月3日定刻通り昼過ぎに濟州島到着。飛行場で旅行会社の金京美さんの出迎えを受け、滞在中のホテル代をまとめて支払い、ホテルへ行くためにバスの乗り方を伝授してもらった。



濟州市の東海岸にある「咸德里」の泊まったホテル。海水風呂がよかった。

バスの乗車法は料金入れに1000ウォン札を入れる。別の穴から出るお釣り300ウォンのコインを受け取る(料金700ウォンと判っている)。簡単だが、運転手に行く先を告げなければいけない(それは京美さんがしました)。このバスで終点まで乗ればよいようだ。最後に乗り込んだAさんの座席がなかったが、かねて聞いていたとおりに、近くの若者が即座に席を譲ってくれた。儒教の国では年長者が偉い。

途中の停留所名は分からなくても、とにかく終点まで行けばいいと思っただけだったのでのんきに構えていた。終点で下車し、タクシーを拾い、京美さんに書いてもらったハングルメモを運転手に見せ、ホテルへ直行。簡単じゃない

か。空港から直接ホテルへ行ってもよかったのだが、京美さんが我々の風体を見て安い方が喜ばれると判断された可能性があるが、バスに乗るのもおもしろい体験だ。

日本にいるときは、英語の看板を軽蔑にしていた。ここは日本だぞ、アメリカかぶれのアホが、と。だが韓国ではバスの窓から観る、看板はハングル記号列で分からない。まれに英文の看板を見付けるととどとどしくスペルを追い、「ほう tailor 洋服屋か」と必要もないのにむりに読んで喜んだ。遠ざけてしばらく会わなかった継母が実は優しかったのか、と気が付くようなもだった。

停留所を次々と過ぎ、たくさんいた乗客は地元のおばさん1人と、我々4人だけになってだんだん細くなったところでバスは止まった。そこは繁華街を通り抜けた場末といったところでタクシーが通りかかるような場所ではない。いぶかしく思っていると、バスの運転手が「^{손바닥}손바닥!!!」と分からないことを叫んだが、「^{카운트다운}카운트다운!!!」と言ったのだろう。荷物を抱えてあわててバスを降りた。降りたところは畑に住宅がすこしずつ侵入したような街はずれだ。これは困った、こんな鄙場でタクシーはどうやって拾うのだろう。

道路の反対側で逆方向のバスを待っているおばさんの一団が居た。M女が機転を利かし、このおばさんらに近づいて、「タクシー?!」と尋ねた。1人の勘のよいご婦人が意味を解したのだろう、タクシーの電話番号のようなものが記載してあるカードを取り出し、しきりと韓国語で説明を始めたがもちろん分からない。ご婦人は、この日本人には通じないと観念して、自分の携帯を取り出しタクシーを呼び出してくれた。

彼女が通話を終わると、ちょっとの間をおいてすぐそばの路地から、タクシーが回り込んできた。タクシーの営業所がほんの近くにあったのだ。気が付くとおばさんたちの一団は、ちょうど来たバスに乗り、車中の人になってしまったので、我々はあわただしくバスに手を振ってお礼とした。

タクシーで10分ほど走り、シーズンオフのリゾート地といったふうの村「^{핸드릭리}咸德里」に建つホテルに落ち着いた。かなり大きな滞在型のホテルで、冷蔵庫、コンロ、ヤカンなどが備えてあり、新しく快適であった。宿泊日本人は我々だけで部屋は最上階の9階、広さは3部屋27坪(韓国でも日本の坪と同じ)でかなり広い。窓からは、漢拏山のずんぐりした全貌が見渡せた。明日は晴れそうだ。

夕食は、近くの焼肉店に入る。少し日本語の分かるお姉さんがいて、ひとまず安心。旨くて安い焼き肉を食べた。食後、近くのスーパーで行動食用のパン、ミカンなどを仕入れ、旅の疲れもあって早く寝た。

漢拏山には4つの登山コースがあるが、山頂まで登れ



観音寺コースの入山券売り場、運転手の榮培さんに買ってもらった。

るのはこれから登る「^{카운트다운}観音寺コース(登り8.7km)」と下山予定の「^{손바닥}城板岳コース(9.6km)」だけである。あとの2コースは、1700m地点で合わさったところから上部は立入禁止となっている。これは植生、登山道の荒廃を防ぐため、数年ごとに立入を制限する韓国独特の「休息年制」という制度のためだ。日本でも「混雑100名山」などで見習ってよい考え方と思う。

▶朝5時30分ホテルを出発

登山コースが長いので朝5時30分ホテル出発とした。そのため4時30分起床、部屋でそれぞれ自分で買ったカップ麺を食べる。カップ麺の標記は数字以外はハングルなので、絵柄の激しさ、おとなしさで味を推定する。エビ、イカの絵は海鮮、肉の絵はブタか牛。赤は「辛い」黄色は「普通」など。しかし食べると、赤くても辛くないものもあり、日本人の感性による色で辛みを判断できないことを知った。

食事その他を済まし、あわただしく支度をして、ホテルのロビーに降りた。がっしりした体つきで年配の運転手氏がすでに待っていて「佐々木さんですね」といい、握手を求めてきた。もらった名刺を見ると「^{김영배}金 榮培」さん、錬金術師のようにざくざくお金が入りそうなよい名前だ。後日、榮培さんに5時30分迎車は初めてだといわれた。

初夏の北海道のような景色を楽しみ、6時過ぎに観音寺コースの駐車場に着いた。標高約580m。ここがいわば木戸門になっており、入場券でなく「入山券」を払う。1人1600ウォン、約200円である。他の登山口にも同様の入山券売り場があり、入山券と登山地図をくれる。我々は日本語版の地図をもらった。4人なのに1枚しかくれなかったのもう一枚もらったが、実際にもらってくれたのは運転手の榮培さんなので、黙っているともらえないのかもしれない。色刷りのよくできた地図だった。

6時10分、出発。登山口近くに使い終わった多数の杖が捨てられた塚があり、日本と同じことをしていると思った。周りは、芽吹いたばかりのコナラのような雑木林が続く日本の里山とあまり変わらない。(続く)

いよいよキャンプ地、花海子(海子=湖沼)に出発する日がきた。不要の荷物は宿に置いて、キャンプに必要な寝袋や着替えは馬で運んでもらう。行動食と水をナップザックに詰めて背負う。今日は青空が広がり嬉しいかぎりだ。

少しだけ車に乗り、馬の供給所まで歩いて上る。馬に乗るのは初めてだ。ここで一人ずつ券を引いて自分の乗る馬を決める。大川さんが「馬子の名前が書いてある券は、後で必要だから、なくさないように」また「馬に乗ったら、鞍の座り心地や鐙の高さをよく調べるように」と言う。

わたしが鞍前の鉄輪につかまって乗ったとたんに、馬子の青年は馬を牽き始めてしまう。言葉は通じないし、そのまま先頭に行くはめとなる。徒歩で登る人の脇を騎乗で進むのはちょっぴりいい気分、視点が高くなり右下の海子溝の谷もよく見えた。

どうなることかと心配したが、馬子はよく心得たもので、道標のある曲がり角に来ると馬から下りるように指示する。下りて後続の来るのを待っていると、大川さんが来て「トイレのあるところで休むので、馬に乗るように」と言う。鍋坪庄の公共トイレは素晴らしくきれいだった。

時々、馬を下りて小休止する。エーデルワイスの咲き乱れる花畑で憩う私たちのかたわらでは乗ってきた馬

たちがのんびり草を食んでいる。「丘に上れば、四姑娘山が眺められる」という大川さんの後についていく。白銀輝く主峰を間近にして、スケッチできたのは嬉しかった。

5時間かけてようやく、遙か向こうにぎざぎざの岩山を望み、手前に緑の山壁を刻む谷あいには花海子(3800m)の湖面をみることができた。ひとくだけで花海子に到着。放牧のヤクの落し物があちこちにあるが、乾燥しているせいか不思議と臭わない。

今朝、籤で引いた「馬子の名前が書いてある紙を出すように」いわれる。馬子と馬の乗り心地を訊かれる。大川さんがその感想を書き入れて馬子に手渡す。この勤務評定が報奨金や罰金につながるようだ。馬子たちは真剣なまなざしで大川さんの手元を覗き込んでいた。その後、馬子たちは馬に乗って帰っていった。

馬に積んできた荷を解き、チベット人の放牧小屋のそ

ばに私たちが寝るテントを4張り、大きな食事棟を1張り、同行のチベット人とみんなで設営する。少し離れてトイレも設置された。じゃんけんで寝るテントを選ぶ。一番勝ったわたしは、食事棟には遠いが、水平な場所に立っているヤク囲いの柵に近いテントに決めた。ここで3夜を過ごすのだ。夕食は同行してきたチベット人の男性がプロパンガスで調理してくれた。美味しいカレーと日本米のご飯だ。給仕は泊まった民宿の男の子が務めて

くれる。デザートのスイカとリンゴも甘くて美味しい。

夕方から降り出した雨で傘をさしてテントに戻る。平らに見えていても傾斜があり、寝ていると体がずり落ちる。大川さんの用意してくれた全身用エアーマットの下に、持参した自分のマットを差し込んで何とか寝心地をよくする。テントを打つ雨音と囲いの中のヤクのブォ、ブォという鼻息を耳にいつしか寝入った。

雨の残る翌朝、卵入りトマトスープとご飯の朝食後、天候待ちとなる。そのうち昨日とは違う馬子たちが騎馬で日隆から上がってきた。ワークシェアというわけで、馬を登録した家々に順番に仕事を割り当てる仕組みらしい。雨具をつけて馬上の人となり花海子の上流にある犀牛海子へ向かう。湿地が広がる真ん中に流れが見

える。道は馬の蹄で掘られてぼこぼこだ。馬子は手綱を伸ばしたり縮めたり、狭い小道を左右に跳んでは水溜まりをよけて歩く。ズック靴なのに滑らない、うまいものだ。

小川を渡るときは馬を下りて、私たちも歩いて石を伝えて渡ったり、木橋を渡ったりする。ミヤマキンポウゲ、オオカサモチ、グンナイフウロ、クロトウヒレン、オタカラコウなどを眼にする。しばらく行くと日本では見られない黄色いケシの花とトリカブトの大群落のひらけた原に着く。行く手に鋭い峰を連ねた5000m級の岩山が見える。目的地の犀牛海子はそれらの山々の手前、数段低いならかな峰上にあるという。

トリカブト原からは道は急な登りだ。馬が1歩ごとに勢いをつけて登る。振り落とされないように鉄輪にしがみつく。それでもキンロバイやハクロバイ、タンポポ、イワギキョウなど目の隅で確認した。



鍋坪庄から見た四姑娘山主峰



上犀牛海子全景

あっと思う間に鞍が谷方向にずれて体が横倒しになる。馬子は「山側の鐙を踏み込め」と指示するが、どうにも戻らない。必死にしがみついた私の体を、ようやく馬子たちが引き戻してくれた。怖くて、あとは自分の足で歩いて少し上ると、山上の湖・犀牛海子(4200m)が現れ、ほっとした。

霧の流れるあいにくの天候だが、私たちだけの別天地。馬たちは解き放たれて思い思いに斜面に散らばり草を食み、馬子たちは集まり歓談の様子だ。

私たちは湖の周りを歩いてひとめぐりする。湧き水が岩間から行く筋も流れ出て、黄色と青のブルーポピーがあちこちに咲いている。足元のとりどりの花々はブルーポピーを除くと草丈の低いものが増え、クモマグサ、タカネツメクサ、ハクサンコザクラ、タカネシオガマ、ネムロシオガマ、ハクサンイチゲのほか、濃い紫の、花の大きなサクラソウなどが見られた。

馬子の少年たちが雨を避けて固まっている岩陰に大輪のブルーポピーが咲いている。花を見ようと近づいていく。と彼らが去った後、花は折られて倒れていた。残念！ブルーポピーにも大輪で毛深いものと小さめの2種類あり、今回の旅では黄・赤・青と三色のポピーを見ることができた。

馬で上った急坂は徒歩で下る。ゆっくり花を觀賞しながら歩くと、紫色のコメツツジも見られた。トリカブトの原から再び騎乗、私の馬子は乗るたびに、「リーメン、リーメン」と声をかけ左側から乗るように言う。キャンプ地に帰り着き、右側に下りようと鐙を踏み込むと、また鞍がずれてしまった。休んでいる間に締め直していなかったのだ。

チベット人の小屋に入って休ませてもらう。真ん中の焚き火に当たりながら、濡れた手袋や雨具を乾かすのだが、煙が眼に沁みて大変だった。ふと見れば入り口に電気洗濯機が置いてある。まさか洗濯機で洗濯をするの？訊いてみればヤク乳を攪拌してチーズづくりに使用するのだそうだ。なるほどそんな使い方があるのだと感心した。

晴天に恵まれた次の日、昨日の犀牛海子の上にある上

犀牛海子を目指す。同じ道をたどってまずは下犀牛海子へ。今日の馬と馬子は元気いっぱいだ。息苦しくなった馬子が前をいく馬の尻尾につかまって上っている。その脇の道をぐんぐん上る。トリカブト原を最後に出発したのに、一人抜き、二人抜き、みんなを抜きさって湖には1番乗りだ。ガスの流れた昨日とはちがった明るい湖がひろがっていた。

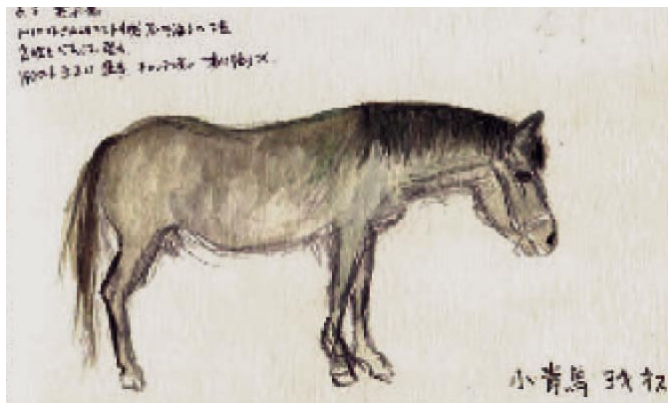
もうお馴染みの花々が咲き競う踏み跡をゆっくり登ること30分ぐらいで上犀牛海子(4400m)に着く。新しく見たのはミヤマタネツケぐらいだ。上犀牛海子からは四姑娘山の主峰が望めるはずだが、雲の中だった。湖の回りを思い思いにひとめぐりする。私は、腰を落ち着けてスケッチ、その後、中間の姿を追う。途中、「氷河から流れ落ちている水です。飲めますよ」といわれた水を飲んでみたが、あまり冷たくなく特別な味もしなかった。この辺りには、サクラソウの仲間が多い。

馬子たちの休む下の湖に戻り、今日はトリカブト原へ新しいルートで下る。草丈の高い黄色の花を付けたラン科やセリ科などの腰近くまで没する花叢をかきわけながら下る。誰も通ったことがなく足元が不安定で足場を確かめつつの下りで神経が疲れた。

原からも、私の馬は仲間を引き離して、広い谷間をぐんぐん進む。馬子の青年が気持ちよさそうに歌うのに合わせるのか、時々、馬がいなくなり、目の前に広がる大自然を鑑賞するうち、真っ先に帰り着いた。おかげで待ち時間に鞍をはずした私の馬(小青馬)をスケッチに収めた。今日の馬の評価は「ハオ」。

キャンプを引き払う朝もよい天気だ。最後に四姑娘山の主峰を眺めようと、大川さんの案内で歩いて昨日からの道をさかのぼる。沢を渡り、途中にあったチベット人の小屋手前から小沢沿いに進む。そこは日本では紫色の花を付けるハンショウヅルが黄花を咲かせて群生していた。花海子本流の広い河原から。谷間の向こうに白く輝く四姑娘山の主峰が別れを惜しんでくれていた。

乗馬も4日目となると、だいぶ慣れた上、やっとおとな



しい馬に当たり、のんびりした気持ちで帰途につく。ところが、下り路で足を踏ん張ったら、カランと音がして鐙が落ちてしまった。馬子があわてて拾い上げて結びつけてくれたけど、こっちもあせってしまった。こうして無事に日隆の民宿に戻りつき、5分間しかお湯が出ないシャワーで3日間の汚れを落としさっぱりする。翌日はまた雨だった。キャンプ地との移動日が晴天に恵まれたのは幸運だ。大熊猫研究所に立ち寄り、成都の高級料理店で打ち上げの宴となった。やっと禁酒を解かれた仲間たちは大いに盛り上がったことはいうまでもない。

(05年7月28日～8月6日歩く)

*スケッチは関根茂子さん自身の作品です。

【わたしが調べた四字熟語 3】

夜郎自大

三澤 統

あまり知られてはいないようなのですが、「夜郎自大」という四字熟語があります。

中国語でも文字は全く日本語と同様「夜郎自大」です。読みは yè láng zì dà です。

意味を調べてみますと「中日辞典」(小学館)には“自分の力量を知らずみだりに威張ること。身の程知らず”と載っています。さらに、「現代国語辞典」(三省堂)では“自分の力も知らずに、仲間たちの中でうぬぼれていること”とあります。

「あの発言は“夜郎自大”以外のなにものでもない。」などと使われるようです。

自他の位置関係を正確にはかれない視野の狭さから、世間知らずとなり、自分が偉いのだと錯覚してみだりに尊大に振舞うことのたとえです。因みに、これに似た日本の諺に「井の中の蛙(かわず)」があります。

この四字熟語の出典は史記の「西南夷伝」です。

中国は漢の時代、今の雲南省あたりに夜郎という国がありました。この国は西南夷と呼ばれる少数民族が立てた国で、1つの独立国でしたが、国土はとても狭く、物産もほんの僅かほどの国でした。それでも十ばかりあった西南夷の国々の中では最も大きな国でした。夜

郎国の国王はこの国を離れたことがないので、いつも自分の国が世界で一番大きな国とっていました。

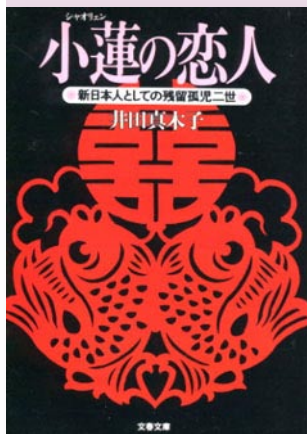
一方、すでに強大な国家を作り上げていた漢は、身毒国(今のインド)との交流を図るため、武帝の時代に張騫という人物を身毒国に派遣することにしました。

今後の身毒国との交流には立派な交通路が必要であると感じた張騫は、武帝に「漢と身毒国との途中にある夜郎国とは緊密な連絡をとるようしなければなりません」と進言しました。そこで武帝は夜郎国に使者を遣わしました。

武帝の使者達に会った夜郎国の王は漢との違いもわきまえない尊大な態度で「漢とわが夜郎国とどちらが大きいのかね?」と尋ねたのでした。余りの世間知らずの質問に、漢の使者達は互いに顔を見合わせながら、思わずこらえきれずに笑ってしまったとのことでした。

道路が通じていなくて交流がなかったために、自分の国が世界で一番大きいと思いこんでいた発言だったのです。

それから、人々は世間知らずのことを「夜郎自大」(夜郎は自らを大なりとする)というようになったということです。



ファンタジーの世界では、さえない主人公が実は魔法使いだったり、お伽の国の救世主だったり…ということがある。そんな小説がベストセラーになる裏には、多くの人の心に「今の自分は仮の姿だ」という悪あがきがあるから、かもしれない。中国の農村で貧困にあえいでいた小蓮の家

族も、母親が中国残留孤児であることが発覚、夢の国・日本へ向かって旅立ち…ということになる。けれど、彼らはそこでバラ色の人生を送ることはできない。

中国残留孤児を母に持つ小蓮とその兄弟たちが不幸なのは、中国人でもなく、日本人でもないことだ。日本にいるときは「中国人」として疎外され、中国に行けば「日本人」として好奇の目で見られる。家族の一人はこんな台詞を吐く。「俺たち、中国にいたときも、日本人の血を引いているから、日本鬼と言われた。今、日本にいと、俺たちは中国人と言われる。誰にもなにも言われない国があればいいのにとと思うのよ」。年頃を迎えた小蓮は、中国と日本の価値観の間で揺れ

ている。両親の中国的な押しの強さに恥ずかしさを覚え、けれど日本の男性と付き合ってもうまいかない。けっして恋人にはしたくないと思っていた中国人の男性と、なぜだかうまくいっている。

ある演出家がこんなことを言っていた。異なる価値観の人たちが集まったコミュニティのほうが活性化することを、皆、頭では分かっている、実際には習慣の違いで衝突してしまう。それを防ぐためにも、ありとあらゆるものが集約された芸術に触れ、違う価値観を受け入れる素地を作らなければならない、と。小蓮も似たことを言う。自分は中国語と日本語を話せるが、これまで言葉は喧嘩のための道具に過ぎなかった。必要なのは文化だったのだと。文化や教養がないから苦しかったと、彼女は10年ぶりに故郷を訪れて初めて悟る。

文化や教養のなさは、受け入れる側にも指摘されることだ。中国残留孤児一家という異文化を受け入れる懐の深さは日本にはなく、そのため彼らは生きにくい祖国で汲々としている。異なるものを受け入れる柔軟さが、自分と違ったものを面白がる余裕と教養から生まれるとすれば、哀しいことに日本はある意味とても貧弱な国なのかもしれない。

(真中智子)

【あさおサークル祭り・報告】

麻生市民館利用団体のお祭「あさおサークル祭」が、5月20日(土)、21日(日)に開催されました。どの団体の催し物もそれぞれ精一杯趣向を凝らし、しかも無料で気軽に楽しめるとあって今年も来館者も多かったようです。

‘わりい’の催しでも馬頭琴関連プログラムは、これまで視聴覚室での催しだった、語りと馬頭琴合奏による「スーホの白い馬」が大会議室に移り、馬頭琴の合奏と合わせて1本化され1時間の催しになりました。

20日開催の「スーホの白い馬」は、今年も大会議室に移り、入場制限の必要もなく大勢の方に来ていただけ、桑原さんの一生懸命の語りにも涙する人もいました。舞台を使用しての初めての語りで、「語りの声が聞き取れにくかった」とのご意見があったことを後で知りました。マイク的位置や、語り手と馬頭琴奏者の位置関係など今後の課題があるようです。

後半、馬頭琴奏者、チ・ブルグッドさんの馬頭琴教室のメンバーによる「万馬馬頭琴アンサンブル」の演奏は、今年、8月、中国内モンゴル自治区の省都・フフホトで、初の外国人アンサンブルとして演奏会が予定されており、それに向けての猛練習中の質の高い演奏でした。



20日は、馬頭琴のプログラムに先立ち、視聴覚室で、任書剣さん監督のドキュメンタリー映画「北朝鮮の夏休み」を、まちだ中央公民館での上映に引き続いて、2回目の上映。

21日午後は、「中国語で歌おう!会」の公開講座が催され、趙鳳英先生に「夜来香」の指導を頂きました。「夜来香」は、70年近い昔の歌ですが、歌い継がれ親しまれており、先生の熱心な指導で繰り返し歌い、講座の終わる頃にはすっかりマスターして「夜来香」の大合唱になりました。

馬頭琴演奏のチ・ブルグッドさんと万馬馬頭琴アンサンブルの皆さん、語りの桑原さん、「夜来香」指導の趙鳳英先生、ドキュメンタリー「北朝鮮の夏休み」を提供くださった任書剣さん、全て無償の‘わりい’への協力で「あさおサークル祭」への楽しい参加になりましたことを感謝したいと思います。

(田井)

“北朝鮮”、この国への印象や評価は、今一番厳しい。拉致被害者の深く、激しい悲しみに、経済封鎖論や改憲して北朝鮮へ宣戦布告論、はたまた北の將軍様と揶揄したり、映像で流れるアナウンサーの独特の節回しを冷笑したり…。実態が見えないまま、脱北者は後を絶たず、貧困故の飢えは為政者の悪政によると憤慨したり、核を脅しに使っていると日本の報道機関は、連日、北朝鮮を『犯罪国家』と非難する。

中国人留学生・任書剣さんは、この日本での北朝鮮報道に驚き、2004年の夏休みを利用して北朝鮮の普通の人々の生活をありのままに撮影し、紹介しようと思いついたという。当初、私はこの映画のタイトルから北朝鮮の人々の楽しい夏休みが描かれているのかと(無知ですみません)思った。が、任さんの夏休みであり、北朝鮮の夏のたった2日間と、その前後の中国東北部と北朝鮮との国境の町・図們及び延辺朝鮮族自治州での数日である。登場人物はごくごく普通のおじさん、おばさん、娘さん、子どもたち。

任さんは映画の冒頭で電話によるインタビューを試みている。沢山の日本人にこれから北朝鮮へ行って来ると告げ、その反応をさまざまに受けるが、「北朝鮮の普通の生活を見てきて」と一人の女性が応じて、彼のこれからの道程は半ば成功したと感じたのではなからうか…。

つてを頼ってこの国境の町へやってきたが、結局1泊2日の短期ツアーに参加する。撮影を制限されながらも、何度も「中止!」と、手をふられても果敢に撮りまくる!「翻訳してください」とインタビューもすごい。ただ残念なことに上映会場の設備故か画質が悪く、字幕が読めない。雰囲気だけ味わうことになってしまった。

『今はわが国は経済状態が悪いが、いつかきっとよくなるだろう』と中年男性。日本への印象は極端に悪い。(好

印象であるはずがないが)。NHK-BS2で放映している“クッキ”の父親は独立運動に身を投じ、中国を目指して鴨緑江を渡って行く。1945年光復節を迎えても、その後の朝鮮(韓)半島は苦難の道が待っていた。分断と内戦、同民族間での血の流し合い。侵略国家・日本からの蹂躪と弾圧、強制連行、従軍慰安婦問題は、その、後遺症を伴い解放後も朝鮮や韓国人たちを苦しめ、今もなお、在日への民族差別を孕んでいるのだ。

しかし、任さんはそんなことを言っている訳ではない。北朝鮮に住む人々は日本に住む人々と同様、勤勉で真面目で将来の夢を語る普通の人々だよと、映像を通して語っているのだ。そして、この映画によって偏見や差別が薄れ、新たな目でアジアの隣人を見て欲しいと訴えている。経済封鎖で、より飢えに苦しむのはこの映画の中の普通の人たちとも訴えている。

この映画を若者にも見て欲しい。サッカーワールドカップの観戦だけではなく地味だが暖かい眼差しで撮ってきた北朝鮮の人々との飾らぬ会話を聞いて欲しい。任さんの情熱で聞きだしたものや、ホロリとさせる場面もある。世界の鬼っ子・北朝鮮を、アフガニスタンやイラク戦争のような無辜の民の屍をみることを心から避けたいと思うのだ。

ドラマ“クッキ”が、時代劇“商道”や“海神”の主人公達はその恩讐を越え、繰り返し愛を説き、道を説き、素晴らしい足跡を残したように、まだまだ見えぬ遠い明日を信じたい。最近、民団(在日日本大韓民国民団)と総連(在日本朝鮮人総連合会)が歴史的和解をしたとニュースが伝えた。在日の南北も統一に向け動き出したと思うのは私だけか。“パッチギ”という映画で繰り返し歌う哀切のイムジン河が伝説になることを祈りたい。

*秋にもう一度上映を考えてみたいと思います。

前ページより【あさおサークル祭り・報告】

「スーホの白い馬」と馬頭琴演奏についてのアンケートより

- …「スーホの白い馬」のお話が好きで、演奏と語りが一度に聴けるとあって、楽しみにしてきました。語りと演奏が一緒になり、風景を思い浮かべ、臨場感もあって、独特の世界を楽しみました…
- …心の中からエネルギーが湧いて来るようでした…
- …馬頭琴がこんな素晴らしい楽器とは知りませんでした。感動しました!草原に響く勇壮な男らしい音。二胡の繊細な音とは異なった生きる力を与えてくれる演奏でした。…(77歳)
- …広々とした草原を思いながら聴かせていただきました。音色が優しく、時に強く、とても心にしました。「スーホの白い馬」の語りもとても素晴らしいです。

「北朝鮮の夏休み」(サークル祭上映)アンケートより

- …朝鮮民主主義人民共和国のことは、テレビのニュースや新聞、書籍などからの情報のみで、今回の映画のようなものは初めてでした。…ありのままの実態を見て、私も海外渡航経験がありますが、人と人は仲良くなれるのだと再認識しました。日々の世界情勢にもっと関心を持ち、また歴史なども踏まえながら、…自分に出来ることを実行して行きたいと思います(20代女性)
- …(北朝鮮の)社会のあり方や人々の様子が活写されていて大変よかったです。中国の方々の考え方や見方が興味深かった…
- …よくあれだけの記録を持って来られたと感心します(80代男性)

4月末、ラオスから戻ってきました。モンの村の図書館(準備小屋)は、柱が立ち、茅葺き屋根ができました。つまり未だ完成していないのですが、安井も鈴木も予定があり、4月いっぱいぎりぎりまで作業をして、今度は秋までに戻ってくると村の人々と約束をして、村を離れたのでした。

実際に木材が全部揃ったのが、3月末でした。本当は1月末には届くという約束だったのです。しかしそれは、遠い山奥の村で、人が手で伐り倒し、手で山から下ろし、手で丸太から挽いて、そしてやっとトラックに載せて運んでくるものです。なかなか予定通りに届くものではありません。待てど暮らせど届きませんでした。やっと届いたと思ったら、片田舎の製材所で製材したものは曲がっていたり、割れ目が入っていたり・・・

日本で私たちが思い浮かべる、まっすぐで直角な角材・・・とは全然違います。また当然ですが、伐りたてのフレッシュな木材は、水分を含んでいます。電のこで割くと、水がほとばしったりしてびっくりしました。当たり前ですが、木は自然の産物。森の命ある木を伐って使わせてもらうのだということ、そして、それは容易いことではないということ、を実感しました。

あまりにも予定から遅れてしまったので、一時は今年は建設をあきらめようかとも話しあいましたが、やっぱり「出来るところまでやろう」ということになりました。鈴木晋作さんと村のモンの大工さんたちが中心となって、やっと届いた木材のうちで使えるものを選びながら作業を進め、4月8日、村の人たちの力を借りて柱がやっと立ち上がりました。一気に棟まで上がらなかったのですが、モンの人たちは棟上げの日には、大勢の人たちが手伝いに来て、昼ご飯を振る舞います。しかし、棟上げの日の前日、まだ準備が整わず、「一体明日できるだろうか?」とわからなかったのが、村の人たちに声をかけなかったし、昼ご飯の材料も準備していませんでした。でも、その日



早朝から女の人たちが、「後で食べなさい」と米を届けたり、「うちで作ったのよ」と豆腐を届けてくれたり・・・男の人たちは、なんとなく建設現場の傍をうろろろしていたりと、結局その日、力を合わせて柱を立て、また、もらった材料で、豆腐料理のお昼を作り振る舞うこともできました。

今回作っている建物には小さな二階があります。一階部分は鈴木くんの設計に基づいて、村の大工さん二人がなるべく正確に慎重に作業を進めていきましたが、二階部分は、鈴木くんのアイデアで、普通の村のモンの人たちができる方法で、村の人たちに任せて作ってもらおうということになりました。4人の男たちに頼むと、彼らはさっそく、歩いて一時間ほどの山の上から大小の丸太を伐りだし運んでくると、竹を伐ってヒモを作り、手際よく作業を進め、一週間ほどで二階部分が出来ました。

みんな村の人たちが、「一階は日本式、二階はモン式で作った家だね」と言って眺めていきます。最後に、村の女の人たちが編んでくれた茅屋根を葺いて、やっと家の形が出来ました。

これまでもゴザを敷いては、子どもたちに絵本を見せたり、絵を描いたり、また、大きい子どもたちは、自然にラオス語の本を借りに来るようになり、いつのまにか、貸し出しも始めていましたが、今度行ったら、もちろん建物は完成させなくてははいけません、まずは、柱と屋根だけの小屋の下で、もう少し本格的な図書館活動を始めたいと思っています。「また絶対来るから」と言って、私たちは村を出てきましたが、きっと村の人たちは、まさに期待と不安が入り交じった気持ちで待っていてくれるに違いありません。

時間はかかっているけれど、その分、少しずつ一緒に作り上げていく・・・そんな気持ちを、その大変さやもどかしさと共に、村の人たちと共有できているかもしれない・・・などとも思ったりしています。今後とも、どうぞ、のんびりと見守ってください。

日本でもホームレスの人達が立ち退きを迫られている様子がテレビに映ることがある。「住むところが保障されない」生活とはどのようなものであるかをケニアで見聞きした私は、日本のホームレスの様子を社会の冷たさとして感じていた。日本には、彼らは働きたくないから、怠け者だからホームレスになってしまった、つまり自業自得ではないか、だから立ち退きを迫られても仕方がないのではないかという風潮があるように思う。本当にそういう人もいるかもしれないが、やむにやまれない理由がある人もいるだろう。

ケニアには、首都ナイロビを中心にして名前のあるスラムだけでも10箇所以上あり、その特徴はひとつの町と思えるくらい巨大化し続けていることが挙げられる。学校あり、病院あり、教会ありと町としての機能を果たせるよう、そこに住む人々のたゆまぬ努力が感じられる。政府は立ち退きを迫るが、もうすでに町として機能しており、どうすることもできないのが現状のようだ。ただ、いろいろな人々や団体が彼らを支えていこうとしている気持ちがあることが日本と違う点だと思う。もちろん、日本にもホームレスを支えている教会や個人や団体もあるが、それは広がりを持って多くの人々に浸透している気持ちとは言いにくいと思う。

スラムとは、何なのだろうか？ ケニアにあるいろいろなスラムを訪ねてみるうちに、すっかり分からなくなった。定義的には、「無計画に立てられた粗末な家に住む、大量の人々の集まる場所」と言えるかもしれない。それ以上に「社会においてもっとも弱い立場の人々」であると思う。そしてそういう立場に置かれる理由は、本当に彼らのせいだけだとは思えない。私が知るスラムに住む彼らが、働きたくないから、怠け者だからという理由でスラムに住まなければならないとは思えない。きっと、私もケニアのその場所で生まれていたら、スラムの住人に間違いなくなっていただろう。そうなるしか道がない社会の現状が根本に



カソイト・スラム

あるのだと思う。

私が住んでいたムロロンゴという場所から車で30分のところに「カソイト」というスラムがあった。地図にもなく、有名でもなく、スラムと呼ぶには小さい場所に数人の家族が住んでいるところであった。私のいたNGOがあるとき、そこに住む人々に何かできることはないか様子を聞きに行くことになった。雨季に入ったばかりであったが、道なき道を車で探す。それは、ポートランドという国営のセメント工場の敷地内であった。24時間、365日稼働している工場の全体が見渡せる少し離れたところに数軒のビニールで作られた家が並んでいた。畑では野菜が作られ、鶏が数羽放たれていて、子供たちも集まって遊んでいた。常に工場からの立ち退きを迫られている彼らは、私たちの突然の訪問に驚き、警戒していたが、事情を説明すると温かく迎えてくれた様子だった。

遠くから、子供たちが声を合わせて歌う声も聞こえてくる。声の聞こえるほうへ行ってみると、屋根も壁もなく木の枠だけの場所に子供たち20人くらいが先生を囲むようにして歌を歌っていた。聞けば、幼稚園としてやっているとのことだった。子供たちの元気さと明るさが眩しかった。スラムに住む子供たちの暗い沈んだイメージは全くない。どこにでもいるような元気で明るい子供たちだ。いや、それ以上に元気で明るい子供たちだ。後日文房具を寄付することを約束し

て、その場を離れた。

そもそも彼らは、ケニアの中でも生活が厳しい北、西ケニアから出稼ぎ目的で家族で移住してきた人が多い。しかし、思ったように仕事に就けず、スラムでその日暮らしをするようになった人々が多い。しかし、彼らは言う。「農村にいるよりはまし。家族が死ぬことはないから」と。「農村の貧困は、都会の貧困よりも厳しい」という。農村のやせた土地、雨が降らなければ農作物も実らない、仕事も全くない。病気にもなれない、学校にも行けないその悪循環は世代を超えていつまでも続く。そしてついに家族で都会に移住することになる。彼らは言う。「都会ではチャンスがあるかもしれないし、助けてあって生きるチャンスがある。仕事を作り出すこともできるかも知れない」。少しでも、現状を変えていこうという前向きな希望を持ってやってきている。そして、仕事を自分で作りだすなど、ものすごく働き者だ。

私は、スラムで数多くの希望にあふれる前向きな人々の言葉を聞いた。缶やビンを集めてわずかな現金に換えて家族を養うお父さんは「子供は絶対学校に行かせたい」と目を輝かせる。わずかな畑で作った野菜を売るお母さんは、「今日家族が食べれるだけ稼ぎたい。それだけで十分」と笑う。今日を生きて伸びるのに一生懸命な人々が、スラムにはあふれている。地方の農村から出てきても失業率が50%を超える首都ナイロビでは仕事に就くことは簡単なことではない中で、政府が何かしてくれることを期待せず、自分たちなりに考え、出来ることで、助け合ってスラムで生きている。努めて明るく、前向きに生きている。

そんな人々を見ていると、スワヒリ語の‘HARAMBEE’（ハランベ）という歌を思い出す。ハランベとは、スワヒリ語で‘一緒に力を合わせて’という言う意味だ。

‘Harambee Harambee Tuimbe Pamoja’
(ハランベ ハランベ トウンベ パモジャ)
=ハランベ、ハランベ、一緒に力を合わせて頑張ろう！

ごみを集めるお父さん、野菜を売るお母さん、屋根のない幼稚園で歌う子供たちの笑顔と声が今でも心に焼き付いている。彼らは、生きる力にあふれていたように思う。

後日、ナイロビにある大きなスラムを訪ねた。スラムの入り口でお菓子を売るお父さんがいた。ひとつ日本円にして30円ぐらいたという。私は、そのお菓子は

相場で5円くらいしかしないことを知っていた。6倍もの値段で外国人に売ろうとしている彼。そばにいたケニア人の友達も「高いからやめときな」という表情をしている。しかし、私には彼の後ろにいる彼の家族が見えてくるようであった。奥さんに、子供、そして故郷の農村に住む数え切れない親戚たち。払ってしまえば、30円もあれば一日はなんとかなるだろうことは分かる。しかし、それは一時的な偽善者の振る舞いだろう。

迷ったけれど、黙って払った。次にお客としてくる外国人にとっても良くないことだろうと思う。そのお金では、彼の人生は変えられない、ただ今日一日の彼の生活は少し変わるかもしれない。私なりのケニアでの‘ハランベの気持ち’ではいけないのだろうか？

‘わんりい’のおたより会員継続のお願いとお誘い

年会費：1500円 入会金なし

郵便局振替口座：0180-5-134011 ‘わんりい’

‘わんりい’の名は、‘万里’の中国読みから付けられました。文化は万里につながるの想いからです。

「それぞれの国や民族が長い歴史の間に培った、それぞれの文化を知り、市民レベルでの国際友好活動を目指している市民ボランティアの会として、日本に外国の方々が増え始めた1992年に活動が始まりました。

主としてアジア各地から日本に見えている方々と協力し、講座、研究会、鑑賞会、展覧会等を開催したり、2月と8月を除いた年10回、会報‘わんりい’を発行しています。

新規入会はいつでも歓迎しています。会費は、おたより制作費と送料及び活動のサポートに当てられています。活動の様子はおたより又は‘わんりい’HPをご覧ください。

‘わんりい’のおたより会員に申し込まれますと、会報送付の他、一緒に活動される仲間として、‘わんりい’の全ての活動に参加できます。

問合せ：‘わんりい’ TEL/FAX：042-734-5100

‘わんりい’掲載原稿募集

‘わんりい’は、会の皆さんで作る会報です。会の活動趣旨に添う原稿やイベント情報を募集しています。明るい楽しい内容でどんどんお寄せ下さい。出来るだけ早く掲載したいと思っておりますが、ページ数の都合で遅れることや若干手をくわえることもありますのでご了承下さい。

*** 問合せ：‘わんりい’事務局へ ***

東京万馬馬頭琴アンサンブル演奏会
〈万馬のとどろき〉 参加無料



2006年7月2日(日)
 19:00 ~ 20:30 (開場 18:45)
 於: まちだ中央公民館・ホール
 定員 150名 (申込者優先)

'わんりい' & 東京万馬馬頭琴アンサンブルによる共催

万馬馬頭琴教室(馬頭琴演奏で活躍のチ・ブルグッド氏指導)から出発の、東京万馬馬頭琴アンサンブル(コンサートマスター/西郷美生子、構成員8名)が、今年8月中旬、中国内モンゴル自治区の省都・フフホトで自主公演をします。

モンゴルの民族楽器・馬頭琴の本場フフホトでの日本人による馬頭琴アンサンブルの公演は初めてとのことで、メンバーは昨年秋より猛練習を重ねてきました。



内モンゴルに出發するに先立って、舞台での正式リハーサルと東京万馬馬頭琴アンサンブルのお披露目をかねた演奏会を'わんりい'と共催ですることになりました。

あさおサークル祭りでも好演奏を披露し、メンバーの演奏レベルの高さをすでにご承知の方も多いと思います。是非、ご参加くださいまして、素晴らしい演奏をお聞き頂き、応援のエネルギーを送っていただければと存じます。

問合せ&申込み: 042-734-5100 'わんりい'

中国第10回全国美術展受賞優秀作品による

現代中国

美術展

5年に1度開催の、中国最大規模の公募展「全国美術展」。その受賞作品の中から厳選の、中国画、油彩画、水彩画、漆絵、年画、連環画、漫画など95点を展示

於: 日中友好会館美術館

〒112-0004 文京区後楽1-5-3 TEL: 03-3815-5085

会期: 2006年5月20日(土) ~ 7月2日(日) (月曜日休館)

*会期中に一部展示替えがあります。

▶前期: 5月20日(土) ~ 6月11日(日) ▶後期: 6月13日(火) ~ 7月02日(日)

- 開館時間: 10:00 ~ 17:00 (入館16:30迄)
- 観覧料: 一般400円 学生200円
- 主催: (財)日中友好会館 / 中国美術家協会

◆「現代中国美術の現状と今後の動向」 5月20日(土) 14:00~15:30

於: 日中友好会館2F 小ホール 定員50名 申込み不要、入場無料

●ジクール・アンサンブル東京公演

青き草原の翼

2006年6月9日(金) 19:00開演(開場8:30)
 於: ルーテル市ヶ谷センター(各線市ヶ谷駅下車10分)
 162-0842 新宿区市ヶ谷砂土原町1-1

参加費: 2,500円(当日3,000円)

問合せ TEL/FAX 03-3946-2834 (田中丸)

●ジークアンサンブルとは: モンゴル音楽、中国音楽、クラシック等のメンバーにより2005年結成。モンゴル国のリンベ(横笛)、モリンホール(馬頭琴)、ホーミー、揚琴、二胡などの民族楽器、チェロ、パーカッションを用い、アジア各地の伝統音楽からオリ ジナルまで幅広いレパーとリーを演奏する。

長年、スリランカと日本を往復してきた、
Sumith Jayakody 氏が語る

参加無料 スリランカ最新事情

2006年6月10日(土) 18:00 ~ 20:30

於: 町田市民フォーラム4F・第二学習室
 町田市原町田4-9-8 小田急線町田駅東口徒歩7分
 JR横浜線町田駅東急ハンス口徒歩3分

講師: Sumith Jayakody (日本語講師、日本語コーディネーター)
 問合せ&申込み: 6月7日迄に、日本スリランカ文化交流協会
 TEL/FAX 042-735-9583 E-mail brb35673@nifty.com

主催: 日本スリランカ文化交流協会
 共催: まちだ・さがみユネスコ協会

6月定例会: 6月20日(火) 13:30 ~ 田井宅

安全で美しい海辺のために
スリランカにタコノキを植えよう!

スリランカにタコノキを植える会・会員募集

かつては、スリランカ全土の海岸線に密生していたタコノキ。スマトラ島沖地震の津波災害のときに果たした役割も大きかったと、現地の人が語っています。

防波林、防風林、防砂林の役割を果たし、乾燥や暑さを和らげ、小動物が住みつきます。葉は女性達の手芸の材料になり、果実は薬用に、花は仏陀への供物です。

そんなタコノキ植林に、ご一緒に取り組みたい!

年会費: 一般会員 一口10,000円 準会員 5,000円
 代表: 渋谷利雄(和光大学教授) 副代表: 高桑史子(首都大学東京教授)

詳細問合せ: 松山弥生 E-mail: yayoi-m@bird.ocn.ne.jp
 251-0043 藤沢市辻堂元町2-2-3-201

まだ間に合います!

「夏を呼ぶ南洋の味・インドネシア料理」

2006年6月4日(日) 11:00 ~ 14:00

於: 麻生市民館料理室

参加費: 一般2500円(会員: 2300円)

定員: 30名(お申込み下さい)

講師: ロサリタ(バンバンルディアント和光大学助教授夫人)

問合せ: 'わんりい' TEL/FAX 042-734-100

ジャワ島中部大地震 お見舞い申し上げます